

## 戦前のユダヤと日本5～蒋介石軍の戦費を賄ったサッスーン商会

山澤貴志 11/06/04

ユダヤは日本の資金源を絶ただけでなく、中国を支え、アメリカの反日感情を煽った。ロスチャイルド＝サッスーンによって日本は中国侵攻をはじめたが、結果的にロスチャイルド＝サッスーンによって敗戦に追いやられたのである。それにしても無能な日本の支配階級であるが、その後も、ロスチャイルドには頭が上がらない。それはどうやって阿片ビジネスで得た利益を隠遁するかにしか関心がなかったからではないかと思われる。

### [リンク](#)

1937年から始まった支那事変（日中戦争）は約8年にもおよんだ。当時貧しかった中国にあって、中国国民党・蒋介石軍は強大な軍事力を投入する日本軍とよく戦った。それは、蒋介石軍の兵器、装備、兵たん部が充実していたからであり、それら大部分の戦費が、ほぼすべてユダヤ財閥「サッスーン」から出されていたからである。

「サッスーン家」はアヘン密売で莫大な富を築いた一族で、並みいるユダヤ財閥の中でも、ケタはずれの財産を保有する、屈指の財閥であった。（サッスーン家は、英ロスチャイルド家の東アジア代理人であった）。彼らは当時、上海を東洋進出への最大の本拠地と考えていた。だからこそ、莫大な資金をつぎこんで蒋介石軍を支え、日本を中国大陸から追い出そうとしたのである。

そしてその背後にはアメリカにおいて「親中反日」のキャンペーンをはったメディアの存在がある。その中心人物は、ヘンリー・ルースというユダヤ人であった。彼は雑誌『タイム』『ライフ』『フォーチュン』『スポーツイラストレイティッド』をつくり、ことごとくアメリカの雑誌文化の原点を築き、「一代でアメリカの雑誌ジャーナリズムを築いた男」と評されていたユダヤ人である。中国山東省で生まれ育った彼は、大戦中、「チャイナ・ロビー」のボスとして、その資金源となって懸命に中国を支援した。蒋介石夫妻を「自由中国」の象徴として絶賛し、蒋介石夫人の宋美齡をアメリカに呼んで一大ヒロインに祭り上げるなどして、親中反日のキャンペーンを大々的に展開し続けたのである。1936年に誕生した彼の雑誌『ライフ』は、フォト・ジャーナリズムを駆使した斬新な手法で、創刊とともに世界中のジャーナリズム界に衝撃を与えていたが、1937年に日中戦争が始まると、日本を悪玉にする有名な写真＝「ガレキの中にたった一人ポツンと取り残された赤ん坊」（上海で撮影）を掲載し、この写真は何千回とコピーされ、欧米社会に「日本＝悪」のイメージを定着させた。

「この男（ヘンリー・ルース）によって、1930年代から『真珠湾』に向かうアメリカの世論は『反日・親中国』に変えられたといっても誇張ではない」といわれている。

ヘンリー・ルースが創業した「タイム・ライフ社」は、1989年に「ワーナー・ブラザーズ」を吸収合併し（「タイム・ワーナー」の誕生）、現在、世界最大の総合メディア企業になっている（売上高268億ドル、社員数7万人）。

ちなみに、ルーズベルト大統領も強烈な「親中反日主義者」で、中国を溺愛し、日本人を“劣等人種”として激しく差別していたことで知られているが、彼の母方の実家であるデラノ家は、サッスーン家と同じく中国へのアヘン貿易で財をなしたファミリーであった。

（「[るいネット](#)」より）